

文化資料室ニュース

第 10 号 2010 年 3 月・札幌市文化資料室発行

札幌市写真ライブラリーの廃止と その所蔵資料の移管について

〔総務局行政部文化資料室資料担当係長〕
竹内 啓

本市の公の施設『札幌市写真ライブラリー』が本年 1 月 31 日をもって廃止となった。平成 5 年の 4 月にサッポロ・ファクトリーのレンガ館 3 階にオープンし、行政としては珍しく本格的な写真専門の貸しギャラリーを備えていたことなどから写真の専門家や愛好者の間からは高い評価を受けていた施設であった。

ところが、近年の施設利用者数の落ち込みや行政が写真の貸しギャラリーを運営する必要性があるのかなどといった観点から、平成 19 年度の本市行政評価（外部評価）において廃止検討の指摘を受け、2 回の市民説明会における利用者からの存続嘆願の声もむなしく、市議会での存続陳情審査不採択の後、惜しまれつつも約 17 年間にわたる施設の歴史に静かに幕を引いたのである。

この間の経緯については、本紙『文化資料室ニュース』第 10 号と同時に刊行した『札幌市文化資料室研究紀要』第 2 号に所収の拙稿『札幌市公文書館への提言－新時代のアーカイブズ論－』にも多少言及しているので、併せて参照されたい。

ところで、閉館となった写真ライブラリーの所蔵資料の多くは、そのコレクション内容（歴史的・文化的写真）に親和性を有する当文化資料室へ移管されることに決まり、本年 2 月 19 日には、無事に資料移管が完了した。今後 2 か月程度の整理期間を経て、まず当該資料のレファレンス業務を再開し、さらに 2 か月程度の準備期間の後に、旧ライブラリー資料（一部）のウェブ公開業務についても再開していく予定である。

従前からの当室所蔵写真が約 42,000 点、これに旧ライブラリー所蔵写真の約 30,000 点が新たに加わることになる。これまで当室が戦前の写真中心、ライブラリーが戦後の写真中心という大まかな棲み分けがあったが、今後は当室による写真資料の一元的管理の下で、利用者への閲覧サービ

ス業務については一層の効率化が図られよう。

従前からの当室利用者に加えて、旧ライブラリー利用者も新たな顧客として迎え入れることにより、昨年末に策定された『札幌市公文書館基本構想』に基づく本市公文書館の開設準備を進めていく上で、今回の写真資料の移管を当室がステップアップするための一つの契機として捉えたい。

写真資料は、撮影された時代を、時として文献資料以上に雄弁に語るアーカイブである。当室は今後、この合計 72,000 点に近い写真資料を施設の特徴（売り）とし、その活用方法についても十分に検討していく必要がある。レファレンスや展示業務を通じて写真というアーカイブの特性を活かし切ることができれば、新しい公文書館にとってもその個性を発揮する上で欠かせない目玉の一つとなってくれるはずである。

『札幌市写真ライブラリー』の設置目的は、「本市の歴史、風俗等を記録した写真を収集し、整理し、及び保存することにより貴重な財産として後世に継承するとともに、これを広く市民に公開することにより市民文化の向上に資する」であった。

この前段などは、写真を公文書に置き換えるとそのまま公文書館のコンセプトの一つとして通用する。ただ、後段や写真文化の振興にまで話が及ぶと、正直、行政文書中心の公文書館の手に余る。しかし、一つの公の施設が使命半ばに廃止となった無念さは重く受け止め、その所蔵資料を受け継ぐ責任についても十分に自覚しておきたい。

一方で、積み残された課題も多い。移管資料の著作権・財産権といった権利関係の整理、複製サービス方法の検討や将来のデジタル・アーカイブズの構築などは、多くの未整理資料の分類・同定・整理作業と合わせて、今後も根気強く取り組んでいかなければならない課題である。あらためて新旧利用者の力強いご支援をお願いしたい。

吉田茂八が漁村にいた！—高澤家文書の紹介

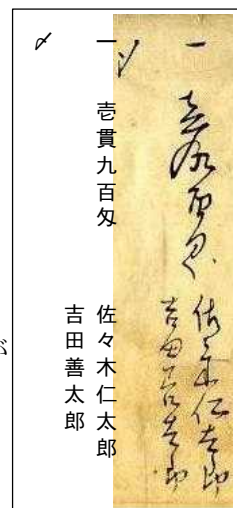
2008年9月初旬、廃棄するために屏風を解体していたら札幌農学校校長調所広丈の名前が書いてあるので貴重なものではないだろうか？と高澤さんから電話連絡が入り、即日持参して頂いた。持ち込まれた六曲一双の屏風を解体して下貼りを剥がし、六曲の屏風表裏12枚に貼られていた文書を1面ごとに整理し目録を作成した。目録の点数は、番号を付したものが629点、その他に断片が少しある。

特に重要と思われる文書のいくつかを紹介すると、先ず吉田茂八の名前が出てきた。志村鉄一とともに豊平川の渡守をした吉田茂八と同姓同名である。茂八は、『札幌百年の人びと』には、戊辰戦争の頃については宮古の吉田茂八と混同されているが、明治11、2年頃に死んだ娘の弔いに行った根室の方で遭難したとか、戸籍上16年に印税犯則初犯過料の記載があるといわれている。最近、明治6年調の「市民商業惣高取調」(新札幌市史第6巻)に名前がある



ことがわかってきたが、その後の履歴は不明である。この文書には、明治13年8月19日付で千歳郡各村戸長役場から漁村組頭にあて、漁村寄留の吉田茂八に御用があるので即刻出頭するよう命じることを依頼している。もしこの吉田茂八が、札幌の吉田茂八だとすると、13年頃またはそれ以前に漁村にいた可能性が出てくる。なぜ呼び出されたかは、上記の印税犯則に関する事、14年の明治天皇来札時に早山清太郎と一緒に天皇に面会するための履歴調などが考えられる。今まで不明であった履歴に曙光がさすかもしれない。

長都村であるが、当時防除に骨折った飛蝗(トノサマバッタ)被害の人別ごとの駆除一覧と思われるものがある。人別ごとの一覧はほかの地域に例があるだろうか。その名前のなかに小久保孫太郎、内館徳蔵、佐々木熊太郎、小原啓八、佐々木仁太郎、佐々木長助の名前が見える。この名前は、内館徳造、小原慶八は文字が違うが、「地租創定請書」(新札幌市史第7巻)にある月寒村の土地家屋所有者と同姓同名である。さらに吉田農場や吉田用水などに名前を残した吉田善太郎の名も見える。これは、月寒村からも長都村に駆除のために集まったからだろう。



残念ながら手習い用紙としたため大半読めないが、12月23日～3月18日(一部欠)の日記がある。しかし読めるところを拾い読むと、日付から12月1月が大の月、2月が小の月であり、この組み合わせは明治にはなく、新しくとも文久元～2年である。タマ風・極寒など気候に関する記述、塩切・あら巻何束など産物名、セカツやメノ、アイヌ名と思われる人名、マタキ、会所などの言葉が、人々が止宿したり出立していることを記述するなかに散見できる。これらから通行屋のような宿泊する施設の日記らしい。登場するヒ・ユウフツなどの地名から考え、この宿泊施設はチトセにあると思われる。より時間をかけて読み込むとわかることも増えてくるだろう。

ユウフツ会所から千歳川会所あての書簡が数通ある。これは、もうすぐ刊行される千歳市史に利用されたが、千歳川買場会所の名称から文化2～5年頃のものと思われる。さらに日付ごとにアイヌ名と思われる名簿と米の量を記している書類が数枚ある。アイヌを雇って日当を払っていると推察できる。総計に「夷介抱」と記しているのも、これも近世と思われる。アイヌ名を調査すると地域がわかるだろう。

その他は、札幌区民の島松辺での伐木願、函衛隊隊長秦斗鬼三(一明)関係の文書、同じ秦一明が千歳郡の戸長時代の文書、石山専蔵が千歳郡各村戸長時代の文書、同じ石山専蔵が千歳駅通時代の書類、アイヌ名の下に筋子の数量を示した書類、小学校の試験成績表、そして最も多い千歳や漁辺りの商人の売掛帳か売上帳らしいものなどである。

これらの文書を総合すると、近世の千歳の会所などの施設の文書が明治に千歳に置かれた戸長役場や駅通に引継がれ、最終的にその一部が屏風の下貼りにつかわれたらしい。おそらく地域がわからない名前の一覧も近世～明治初期の千歳辺りの人々と考えられる。

(文化資料室 榎本 洋介)

★歴史資料整理員だより③

★歴史資料整理員、日々是勉強！

私は今年の3月末で非常勤職員の任期満了を迎えます。そこで、この3年9か月間の業務について振り返ってみたいと思います。

私たち歴史資料整理員(2名)の業務の中心は札幌市の公文書である行政文書等の整理です。最初に、公文書館が開設された後の公文書公開に備えて、公文書のデータ整備を行います。その際に、利用者が閲覧したい公文書を検索あるいは特定しやすいように、件名(起案等のタイトル)や内容年月日等の採取をします。ちなみに2009年度の公文書処理件数は約340簿冊(公文書を綴っているバインダーやフォルダ等)、採取件数が約2,150件でした。

次の優先業務は、現在利用者に閲覧・公開している資料のデータ整備です。2008年度は地図目録についてのデータベース整備を行いました。地図は比較的利用頻度の高い資料であることから、早期に整備する必要もあり、業務分担の枠を超え、大人数で短期間に集中して完成させました。

また、私文書とよばれる個人・団体からの貴重な寄贈資料の整理もありました。こちらは公文書等の整理業務の合間を縫って行うため途中で中断することもあり、完結するまでに時間がかかります。特に点数が多い資料群などは、目録作成に何年も費やしてようやく完成をみるというようなケースもあります。



例えば、最後の取りまとめ部分に関わり、私にはとても印象深い「秋葉安一資料」などは、

2005年11月の仮受入から2009年10月までの4年間、2名の歴史資料整理員が代替わりしながら目録を完成させました。

私が資料に接した当初は、段ボール大の保存箱で15箱もあり、その内3分の2がまだ手付かずでした。最終的にアイテム(管理上それ以上は分けることのできない最少単位)2,345件、記述単位(1つのかたまりとして扱われる記述上の基礎単位となる記録)1,537件に及んだこの資料群に、仮番号や箱名・資料名を付け、内容・作成者・内容年・形態・サイズ・頁数(数量)を調べて備考を含む表形式全項目を記載し終えたのが2009年の3月でした。

しかし、この時点ではまだ個別資料ごとの目録が完成

しただけであり、資料全体の概要記述が終わったときにはじめて目録は完成することになります。

通常の資料群は、比較的簡易な概要目録(収録期間、作成者経歴、資料概要、資料整理の方法等)を作成しています。しかし、「秋葉安一資料」は資料群としてのボリューム自体が大きく、作業工程で目録の作成方法や記述項目を何度か変えていることもあり、概要目録の作成にあたっては、より詳細なものが必要だと思いました。また、作成の際には改めて自分自身の目で現物を確認し、かつ咀嚼する必要がありました。

しかも、この資料群は作成者によって分類されたものではなく、文化資料室に移されたとき、職員が任意に箱詰めしたものだっため、これを主題別に整理して記述していく必要がありました。当初、「秋葉安一資料」には3つの主題「鉱山関係」、「北海道教育大学附属札幌小・中学校関係」、「統計調査関係」が推定され、それらに着目しながら目録の作成が始められました。その後「短歌・文学関係」、「二中・西高関係」が加わり、さらに「道内思想主義・貸本屋・文学関連」に関する貴重な資料も見つかり、最終的には大きく6つの主題を念頭に置きながら資料の再調査を行いました。

同時に、作者の履歴・家系図などの作成にあたっては、同一事項に関する複数資料に矛盾や相違がある場合、どちらが正しいか、またはどちらも誤りであるかなどを判断するための調査を行い、その事実を裏付ける資料が有る場合は備考にその資料番号を記載しました。

その結果、概要目録が4枚、別紙参考として、「履歴」、「家系図」、「公的・私的団体活動歴」、「箱別詳細」ほか計13枚、表紙と「凡例」が計3枚、表形式の個別目録が152頁、総計では172枚の資料目録となりました。

一時は資料を確認するほどに矛盾点が生じて困惑したり、自分の知らない事実を発見するたびに、調べたいことは増えていきました。最後は後ろ髪を引かれる思いで区切りをつけ、「秋葉安一資料」目録は完成しました。

しかし、今あらためて目を通すと依然として改良の余地は残されているようです。この点についてはこれから後に続く人たちが、新しい私文書目録を作成する際に、手を加えたり、工夫を施すなどして徐々に完成度を高めていってもらえればと思います。

最後に、これまで取り組んできた資料の整理やデータの整備が、市民の皆さんの資料の読解や利用の促進に役立つことを心から願っています。

※(なお、私文書など既に整理された資料につきましても、個人情報保護の観点からその全てを公開できるわけではありません。)

(歴史資料整理員 紺野 忍)

刊行物紹介

『札幌市文化資料室研究紀要』第2号

昨年3月に創刊した『札幌市文化資料室研究紀要』の第2号を発行します。

今号は、21年11月に策定された「札幌市公文書館基本構想」の特集号です。

3月末日発行!

文化資料室ホームページからダウンロードできます!

<http://www.city.sapporo.jp/bunkashiryo/publication/index.html>

※販売・一般配布はしていません。当室及び札幌市立各図書館で閲覧できるほか、各都道府県の公文書館等関係各機関に寄贈しています。

特集	札幌市公文書館基本構想 公文書館基本構想の策定過程について 公文書館基本構想検討委員からの提言 公文書館基本構想検討委員会市民利用会議委員からの提言
論文	札幌市公文書館への提言
論文	公文書館における利用者サービスのあり方について

写真に見る札幌

昔の写真から札幌の歴史をふり返ってみましょう。今号は狸小路の話題です。

明治のはじめに発祥した狸小路商店街は、現在も市民や

観光客の皆さんで賑わっています。右は昭和初頭の2丁目を写した絵はがきです。その右下に



は『殷賑の街、狸小路』という紹介文があり、のぼりや看板など、今と変わらず活気のある様子が伝わってきます。

さて、この絵はがきには、人々の服装や店構え以外、今と大きく違う点が3箇所あります。

画面右側中央に、白い小さな丸が並んでいるのが見えますか?これは鈴蘭灯という装飾電灯です。大正5年、3丁目内に設置された横断街灯が名物になったことをきっかけに、昭和4年に初めて5丁目も鈴蘭灯を完成させました。北海道で最初に設置された装飾電灯ということで、これを見物するため狸小路へ出かけたという方もいたそうです。

『札幌狸小路発展史』によると、昭和5年6月に札幌狸小路連合会長若狭由次郎氏が会員に通知した道路整理に関する注意事項の一つに「庇ヨリ道路二向ッテ差出ス看板ハ鈴蘭燈ノ柱ヨリ前二出サザルコト」としたり、札幌神社大祭にあわせた大売出し開催時には鈴蘭灯の柱に紅白の布を巻き付けて装飾したりと、狸小路の街並みの一つの

基準となっていたようです。太平洋戦争による金属供出のため17年に姿を消しましたが、戦後、商店街の復興に伴い24年、合計37基が再建されました。その後、アーケード設置のため撤去されましたが、昭和期の狸小路のシンボルとも言えるでしょう。また、この年は百円札のつかみ取りを開催しています。日本初の試みだったそうです。

2つめは、電信柱が建っていること。31年、景観や通行上の安全等から300万円ほどの工費をかけて電柱を撤去、電線を地下に埋没する工事を行いました。

最後のひとつは、まだアーケードがないこと。33年12月23日、3丁目にアーケードが完成した当日の北海道新聞は「雨、雪にあたらずにお買物ができます」というキャッチフレーズどおりなかなか立派なもの」と報じています。このアーケード設置も北海道初でした。各丁毎に、電気ネオン管での装飾デザインが異なっていたそうです。その後57年に現在の天井が開閉する仕組みのアーケードが完成し、さらに平成14年、大型電光スクリーンなども設置され、より近代化したものへと変化しました。

こうして昔の写真と比較しながら、色んな場所を散策するのも楽しいのではないのでしょうか。何気なく歩いている街の風景に、札幌の歴史を感じることができると思います。(参考:『札幌狸小路発展史』、『狸小路130年誌』、北海道新聞)

文化資料室 利用のご案内

- 開館時間 ■ 8:45~17:15 ■入館料 ■ 無料
 - 休館日 ■ 土・日・祝日・年末年始(12月29日から1月3日)
 - 郷土史相談室・札幌の歴史展示室がご利用になれます■
 - ご来館の際は公共交通機関でお越しください■
- 交通アクセス/東豊線「豊水すすきの」駅下車6・7番出口から徒歩3分、または南北線「中島公園」駅下車1・2番出口から徒歩5分



文化資料室ニュース 第10号・2010年3月

発行 札幌市文化資料室 〒064-0808 札幌市中央区南8条西2丁目

Tel・文化資料室事務室 011-521-0205, 郷土史相談室 011-521-0207 Fax・011-521-0210

E-mail・shiryoshitsu@city.sapporo.jp URL・http://www.city.sapporo.jp/bunkashiryo/